漫才とコントのネタメモ

公私混同侍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

基本的にはコンビでの漫才やコントのネタを書いていきたいと思っています。

自称次世代型スマイルメーカーの汗と涙の奮闘記録です（笑）

一つでも共感できる部分があったら嬉しいなぁ（＾ｏ＾）

目次

ニワトリヘアーのクレーマー ―― 1
こんな結婚式のスピーチは嫌だ ―― 6
絶対にヤってはいけない病院ロケ 10
クソみたいな漫才 ―― 16
大統領の素顔 ―― 20
青春は玉蹴りだッ!! ―― 24
やっぱり俺はやってない（6人コント） 30
サイコーの友人 ―― 43
相方はラッパー ―― 47
ユーは何しに床屋へ？ ―― 52
カタカナが苦手 ―― 57
少年野球と親 ―― 60
ドライブデート ―― 63
中古で買った冷蔵庫 ―― 66
半魚人 ―― 69
タバコとライター ―― 73
休みたい ―― 78

ニワトリヘアーのクレーマー

A→ボケ（店員）
B→ツッコミ（客）
モヒカンヘアのBが来店するところから始まる。
A「いらっしゃいませ～」
B「おいおい兄ちゃんよぉ！ちょっと聞きてんだけどさぁ――」
A「（二度見して）ああ！申し訳ありません、お客様。ペットの持ち込みはご遠慮させて頂いております」
B「ペットなんて持ち込んでねぇから。お前、髪型で決めつけただろ」
A「それは申し訳ありません。それでどういったご用件で？」
B「あのさぁ、ここで味噌パンを買ったのよ。それがさぁ、味噌が中に入ってないわけ、これどういうこと？」
A「味噌パン？ああ、下着コーナーでしたら入り口にあるＵＦＯキャッチャーで取れますよ」
B「ちげーよ、パンツの話なんてしてないだろ。しかもＵＦＯキャッチャーで取れ

るってこの店おかしいだろ」
A「もしかしてお客様、ノーパンなんですね！実は僕もなんですよ！」
B「いい加減パンツから離れろよ。ていうかなにカミングアウトしてんだコイツ」
A「お客様、本当に味噌パンなんて買ったんですか？」
B「買ったから持ってきてんだろ。嘘だと思うなら見てみろ」
A「はぁ……あっ！本当だ！何も入ってない！」
B「だろ？だから返金して」
A「申し訳ございません。すぐ対応致します……チーン」
B「古いレジ使ってんだな」
A「今のは電子レンジの音でございます」
B「紛らわしいな、コンビニかよ。ていうか何温めてんの？」
A「気になります？実は焼き鳥を温めていたんですよ」
B「今仕事中だろ。ていうか臭いすげーな。なんか腹減ってきた。その焼き鳥どこで売ってんの？」
A「お、お客様、それ共食いですよっ！」
B「てめぇ、ぶっとばすぞ！ニヤニヤしながら言いやがって」
A「アハハ、半分冗談ですよ」

B「半分は本心かよ。サラッとひでーこと言ったな」
A「えー焼き鳥をお買い求めでしたら、この店を出れば隣が養鶏場になりますので――」
B「え？直で買うの？しかもこの店の隣が養鶏場ってどんな立地してんだよ。経営者、頭おかしいな」
A「アハハ。お客様、そんなわけないじゃいないですか。その養鶏場の隣が焼き鳥屋なんですよ！」
B「行きたくねーよ！養鶏場の隣が焼き鳥屋って一番駄目な組合せじゃねぇか。もういいからさっさと金返して」
A「お客様、良いタイミングで来店されました。素敵なキャンペーンがございます」
B「ん？キャンペーン？まじ？オレそういうのすげぇ好きだから気になる」
A「なんと商品を返品に来たお客様限定のカムバックキャンペーンでございます」
B「バカにしてるよな。なんだよカムバックキャンペーンって」
A「なんとなんとお客様にクレームポイントを贈呈致します！」
B「クレームにポイントつけるなよ。店潰れるぞ」
A「クレーム一回につき1ポイント。１００ポイント貯めれば豪華な特典もおつけします！」

B「クレーム起こす気満々じゃねぇか。どうしようもねぇな」
A「気になりません？」
B「豪華な特典だっけ？一応聞くけど何なの？」
A「我が社一スタイル抜群！容姿端麗の専属スタッフと一年間お電話出来る権利を贈呈致します！」
B「それコールセンターだろ。しかも顔が見えなきゃ意味ねぇじゃん。一年も電話する奴とかいるか？」
A「お客様、察しが良いですね」
B「誰でも分かるだろ」
A「もちろん、顔写真はファックスでお送り致しますよ」
B「いや、なんで今時ファックスなんだよ。白黒で送るなんて時代遅れだろ」
A「更に履歴書でも使える写真もおつけしますよ～」
B「証明写真機で撮ったやつだろ？プリクラで撮ったみたいな言い方するな」
A「ぷっ！お客様、プリクラで撮ったら髪が納まりませんよー！（両手でモヒカンヘアを作りながら）」
B「ふざけんなよ！もう、お前じゃ話になんねぇから店長呼べよ」
A「店長でしたら養鶏場にいますよ」

B「もういいよ」

こんな結婚式のスピーチは嫌だ

A→ボケ
B→ツッコミ

A「ところでもうすぐ結婚のシーズンだよね」
B「話の入り方が雑すぎ。急にどうした？」
A「いやあ、結婚といえばスピーチがあるじゃん？」
B「まあ、定番だな」
A「もし、僕がスピーチを頼まれたらどんな話をしようか考えてたんだ」
B「誰もお前なんかに頼まないと思うけど」
A「それじゃあ、僕がスピーチするから直した方がいい所を指摘して」
B「そんなにやりたいのね。まあ、いいけど」
A「――えー、ごほんごほん……うっ、げほっげほっ！ぶぉぇぇぇー！」
B「あーあ、緊張し過ぎてむせちゃったよ。しかも吐きやがった」
A「失礼しました。大変うっぷうっぷな姿をさらしてしまい申し訳ありません」

B「そこはアップアップな。うっぷうっぷだとまた吐いちゃうように聞こえるから」
A「えー、ヤマト君とナデシコさん、ご結婚おめでとうございます」
B「名前が実に古風だな」
A「あっ！間違えた！顔の平たいヤマトさん――」
B「そこ付け足す必要ないだろ。顔の平たいって絶対バカにしてるよな」
A「小綺麗なナデシコさん――」
B「なんか嫌みっぽくね？」
A「並びに偏屈なご両家――」
B「ただの悪口だろ」
A「ただ酒が飲めると騒ぎまくるご親族の皆様――」
B「確かに」
A「心より御祝い申し上げます」
B「嘘つけ！さっきまで悪口ばっかりだったじゃねぇか！」
A「ただいま紹介に預かりましたヤマト君の友人の友人のカイダと申します」
B「どっかで聞いたことあるな」
A「本日は友人の友人を代表いたしまして、御祝いの言葉を述べさせて頂きます」
B「友人の友人ってもはや他人だろ」

A「ヤマト君は小学生の時からの幼馴染みで運動神経が良く、特に野球が好きでしたね」
B「ヤマト君、野球が得意なのか」
A「僕とヤマト君は素振り仲間で一番の友人でもあります」
B「素振り仲間って何？普通キャッチボールじゃないの？」
A「あっ！アハハハ、決して下ネタではありませんよ？」
B「わかってるわ！式場が変な空気になるじゃねぇか！」
A「ナデシコさんは小学四年の時に引っ越して来ましたね」
B「ナデシコさんは転校生だったのか」
A「あまりクラスに馴染めず、いるのかいないのか分からない。そんな雲の上の人の様な存在でした」
B「どんな褒め方だよ！ナデシコさん可哀想だろ」
A「あっ！アハハハ、決して新郎の隣にいるのは幽霊ではありませんよ？」
B「やかましいわ！何上手いこと言えたみたいな表情してんだ！」
A「そんな二人の運命の出会いは大学の新入生歓迎コンパでした」
B「新歓コンパ？そんな話聞きたくなかったよ……」
A「ヤマト君はお酒に弱くすぐつぶれてしまいたしたが、ナデシコさんはお酒を飲む

に飽きたらず頭からビールを浴び始めました」
B「俗に言うビールかけだな」
A「ヤマト君はそんな男前なナデシコさんに一目惚れしました」
B「あっそう」
A「そして二人はなんやかんやで結婚に至りました」
B「はしょり過ぎだろ。なんやかんやで済ますなよ。一番重要じゃねぇか」
A「最後になりますが、夜の素振り仲間がいなくなると思うと少し寂しい気もします」
B「しつけーな！いい加減下ネタから離れろ！」
A「アハハハ、でも相手も幽霊みたいなものだから目くそ鼻くそですね」
B「言い方があるだろ！そもそも何が目くそ鼻くそなんだよ！」
A「つたない話ではありますが、御祝いの言葉とさせて頂きます」
B「つたな過ぎだよ！いい加減にしろ！」
A「どうもありがとうございました！」

絶対にヤってはいけない病院ロケ

A↓ツッコミ（視聴者）
B↓ボケ（リポーター）

B「ところで最近、芸人の仕事だけじゃなくて色んな仕事にチャレンジしていきたいなとか考えたりするんだけど、Aさんはやりたい事とかないの？」
A「俺はないね。Bさんは何がしたいの？」
B「僕はロケがしてみたいね」
A「ああ、ロケね。例えばどんな場所に行きたいの？」
B「僕ね、病院でロケをしてみたいんだよね」
A「え？病院？病院ロケなんてあるの？他にもっとあるでしょ、飲食店とかスーパーとか――」
B「とりあえず一回やってみよ！ねっ？」
A「えー」
B「僕、リポーターやるからAさんはテレビにツッコミを入れる視聴者ね」

A「ああ、俺はテレビを見てるわけね。いいよ」
B「――はーい、今回僕達は都内にある超一流ホテルの跡地にやって参りました」
A「僕達ってお前一人しかいねぇじゃん」
B「実はこの跡地について耳を疑うような話が飛び込んできたのです。なんと超一流ホテルの倒産の理由が経営者の夜逃げだというのです！」
A「なるほどねぇ」
B「更にこの跡地に日本最大のクリニックが建設されたというのです」
A「なんだよ日本最大のクリニックって。リゾート施設じゃねんだから普通にでっけぇ病院造れよ」
B「という訳で我々はその真意を確かめるべく足を運んでいきたいと思います！」
A「大丈夫なのか？この番組」
B「あっ！ここですね。見て下さい！この建物、出来立てホヤホヤのコンクリートでできてますよ（大袈裟なリアクションで壁を叩く）」
A「なんで出来たてホヤホヤって分かるんだよ。触ったら普通熱いだろ。木造だったらなんてコメントするつもりだ」
B「早速、中に入ってみましょう――おっとこの扉、結構重量感ありますね。これなら注射が苦手な子供に逃げられることはなさそうですね」

A「そんな説明いらねぇよ。子供が余計怖がるだろ」
B「あちゃー、どうやら僕達は朝礼の時間に来てしまったようです」
A「どんなタイミングだよ。最初に調べとけよ」
B「早速、お話を伺ってみましょう」
A「空気読めよ」
B「おやおや、どうやらこの方がこのガンダーラ・クリニックの院長先生のようです」
A「ガンダーラ・クリニック？ネーミングセンスすげぇな。看護師さん達、どんな気持ちで働いてんだよ」
B「こちらにいらっしゃるガンダーラクリニックのイトウ院長はかなりご年配の方のようです。顔中に広がるたくさんのシワがチャーミングゥ！」
A「どこ誉めてんだよ。もっと誉めるとこあるだろ」
B「あはっ！どうやら喜んでくれているみたいですね。左の口角が上がってます」
A「苦笑いだよ！見て分かんねぇのかよ！」
B「そして院長先生の隣に突っ立っているのはガンダーラクリニック随一のイケメン、ヤマダ看護師でーす」
A「へー」
B「え？なになに？髪が薄い事で悩んでるって？ちょっと見せて頂けますか？――

あー、ホントだ。ちょっとカメラさん、こっちこっち。見える？ここだけ毛が生えてないないんだよぉ？どうやらヤマダ看護師は髪を短く剃りすぎちゃうくらいのおっちょこちょいな人みたいですねぇ！」

A「円形脱毛症だよ！すげぇストレス抱えてんじゃねぇか！もうそっとしといてやれ！」

B「え？何ですか？当クリニックには隠し通路がある？えー！本当ですか？是非確かめに行きましょう！」

A「はあ？クリニックに隠し通路なんてあんのかよ」

B「ほう、ここですね。それでは入ってみましょう。う～ん、何だが薄暗くて洞窟みたいですね。じめじめしてるし、たくさん石が転がっています。うわぁ、壁に虫がウジャウジャいる～気持ち悪い～」

A「衛生状態最悪じゃねぇか！そんなもんさっさと封鎖しろよ！」

B「ふう、やっと出られました。いやぁ、何だかまるでハリー・○ッターの世界を擬似体験している気分になりました」

A「どこにハリー・○ッターの要素があったんだよ。J・K・○ーリングもドン引きだろ」

B「いててっ！そういえば今日サンダルで来ちゃったんで、足擦りむいちゃました」

A「ロケにくる格好じゃねぇだろ。よく洞窟みたいなところ歩けたな」
B「最後は屋上に行ってみましょう」
A「もう病院関係ねぇじゃん」
B「いやぁ、これは絶景ですね。灰色の山が一面に広がっていますよ」
A「雲だよ。山が雲に覆われてんだよ。灰色の山なんて聞いたことねぇよ」
B「おっと！あそこで一組の男女が語らっているみたいです！ちょっとお邪魔しちゃいましょう！」
A「余計な事するなよ～。ほっといてやれよ～」
B「すみません～、ちょっとお話をお伺いしてもよろしいですか？」
A「あーあ、二人ともすげぇ困惑してるじゃん」
B「恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしちゃいましたねぇ。お二方の幸せをテレビを見ている視聴者にもお裾分けしたいものです。これぞまさに恋の院内感染、なんてね！」
A「なんてね、じゃねーよ。院内感染のネガティブなイメージが強すぎ。病院の評判にも関わってくるだろ」
B「お二方、これからも末永くお幸せに！」

A「う～ん。これならさぁ、ヤラセでもいいから台本があった方がいいんじゃないのかな。グダグダしてるところを見せられると見てるこっちが疲れちゃうよ」
B「――そうだね」
A「会話してんじゃねぇよ！何が「そうだね」だ！」
B「――アハハハ」
A「急に笑い出すんじゃねぇよ。サイコパスか」
B「――というわけ今回はガンダーラクリニックの特集をお届けしました」
A「おい、最後の方駆け足過ぎだろ。カットし過ぎて情緒不安定みたいになってるじゃねぇか」
B「次週は焼き加減に定評のある葬儀会社、ヘルファイアを調査したいと思います！」
A「次の方が気になるじゃねぇか！いい加減にしろ！」
B「それではさようなら～」

クソみたいな漫才

A→ボケ
B→ツッコミ

A「コリャアやっチャイナ！日本のジーパン、グー！」
B「意味わかんねぇよ。しょっぱなから飛ばしすぎ」
A「コリアとチャイナとジパングがかかっていたんだが、気づかないとは。ああ！情けない！」
B「脈絡が無さすぎるんだよ。もっとあるだろ、ロシアの殺し屋オソロシヤとかみたいな」
A「うーん……なんかこう、オリジナリティーが足らないよね。もっとこう、脳裏に塗りつけるようなインパクトがあるようなものがほしいよね」
B「それを言うなら脳裏に焼き付けるだろ。う○こみたいに言んじゃねぇよ」
A「今日のツッコミもキレイキレイだねぇ（手のひらを擦りながら）！」
B「それを言うならキレキレだろ。下手クソかお前は」

A「あーあ！才能の無さを悔やんでも悔やみきれなくて夜泣きもできねぇなぁ」
B「お前は赤ちゃんか。大の大人が声出して泣くんじゃねぇよ」
A「じゃあ、Bさんならどんな泣き顔を見せるの？」
B「え？俺？俺が泣いたらそりゃ……白目向きながら号泣するね」
A「おいおい、まるで便意を極限まで我慢してるみたいじゃないか」
B「糞みてぇな例えだな。いい加減う○こから離れろ」
A「暇な時は映画を見たりとかしないのぉ？」
B「急に話題変えたな。まあ、映画はあんまり見ない方だと思うけど」
A「えぇ―！」
B「別に驚くところでもねぇだろ」
A「一人でいるときは何してるの？……ああ！ま～さ～かぁ～（？▽？）」
B「また下品な想像してんのか」
A「さては野グソだなぁ？」
B「家にいる前提じゃねぇのかよ！ていうか野グソなんてしたら捕まるだろ！」
A「そうだよ！ブタ箱行きだよ！このクソ野郎！」
B「ただの悪口じゃねぇか、ふざけんな」
A「なんかBさんの顔見てたらトイレに行きたくなってきた」

B「すげー失礼なヤツだな、お前」
A「あっ、どうしよう……」
B「なんなんだよ、面倒くせーな」
A「見て見て！そこのトイレ、大名行列出来てるよぉ」
B「江戸時代かよ、一体何列で並んでるんだ？」
A「三列みたい。しかも一つしかないのに」
B「一つしかねぇのに三列で並ぶってどうしようもねぇな」
A「それに和式だよ」
B「そればっとん便所じゃん。並んでるやつアホしかいねぇのかよ」
A「はーあ、諦めるしかないかぁ」
B「諦めんなよ、漏らすしか選択肢ねぇだろ」
A「まあ、僕はオムツ履いてるから漏らす心配ありませーん」
B「お前、オムツ履いてたのかよ。なんか嫌だ」
A「隙間から漏れる心配もありませーん」
B「そんな情報いらねぇから」
A「おつむが弱い人間はオムツを履きませーん」
B「ややこしいな。ただの偏見じゃねぇか」

Ａ「今からカレー食べに行きまーす」

Ｂ「クソみてぇな思いつきだな、いい加減にしろ」

大統領の素顔

A→ボケ
B→ツッコミ

B「はぁ……」
A「悩みがあるなら聞いてやるよ……足臭いなぁ」
B「それを言うなら水臭いだろ。足が臭かったら誰だって悩む……って鼻をつまむな！」
A「僕には分かるよ。Bさんって手癖悪いよね？」
B「それはお前の方だろ」
A「最近、手癖の悪い男が増えたような気がするんだ」
B「そうか？ちょっとよく分かんないけど」

A「――その国はセクハラ、浮気、不倫が横行する手癖の悪い国だった」

B「ガチで最悪な国だな。大統領ぐらいはまともであってほしい」
A「その国の大統領も手癖が悪く、老若男女を問わず、好みのタイプは魑魅魍魎。すなわち『来る者を拒まない』という嗜好の持ち主であった」
B「よく大統領になれたな。手癖が悪いとかいうレベルじゃねぇよ」
A「国民は大統領を熱狂的に支持し、国会前はいつもプラカードを持った群衆が出待ちをしていた」
B「それデモ隊だろ？支持されてるって言わねぇよ」
A「それを見た大統領は当たり前のように親指を下に向けて、笑みを振り撒いていた」
B「クズじゃねーか！子供の喧嘩かよ！」
A「そんなある日、大統領にある疑惑が持ち上がる」
B「疑惑だらけだけどな」
A「それは大統領が性的嗜好を全面に押し出した法律を作っているのではないかと!?（。Д。）」
B「すぐ気づけよ。なに初めて知ったみたいな顔してんだ」
A「まずはポニーテール禁止」
B「え？それ困る」
A「だろ？」

B「うん……じゃねぇ！俺のフェチを曝け出しちまったじゃねぇか！」
A「しかも男のポニーテール」
B「男かよ！スゲー国だな！」
A「次はイケメン税」
B「イケメンに税金をかけるってこと？」
A「そうだ。大統領が決めたイケメンは苦しい生活を余儀なくされるのだ」
B「何でだよ！理不尽すぎだろ！」
A「だがこの法律のせいで国中の男達は――顎をシャクル生活を余儀なくされたのだぁ！」
B「だぁじゃねーよ！ふざけてんのか。ていうかシャクレてる人に謝れ」
A「最後に男は大統領になれない」
B「え？……ちょっと待って、大統領は……女？」
A「そのつもりで喋っていたのだがなぁ」
B「男だと思ってた……」
A「ちなみに大統領はツインテールだよぉ」
B「……おい、想像しちまったじゃねーか！」
A「しかも容姿端麗」

Ｂ「聞くのが怖いんだけど年齢は？」
Ａ「なんと２０歳で大統領になったんだぞ！」
Ｂ「嘘だろっ!?二十(はたち)かよ！めちゃめちゃ若いな」
Ａ「ちなみに１９５０年生まれだ」
Ｂ「ババアじゃねぇか！いい加減にしろ」

青春は玉蹴りだッ!!

A→ボケ
B→ツッコミ

A「Bさんはサッカーが得意だけど、やっぱりモテるのかい？」
B「いや、モテないけど」
A「それ以前にサッカーがなんたるものか理解できなければ、ピッチで闘志をぶつけ合う者達の気持ちは理解できない。そう思わねぇ？」
B「急に馴れ馴れしいな。まあ、言いたい事は分かる」
A「それにサッカーのルールは難しい。だからこそ我々は説明責任を果たせねばならない。そう思わんかね？」
B「思わんかねって言われてもなぁ、どうやって説明するんだよ」
A「簡単な事だ。人生に当てはめればいいのだ」
B「例えば？」
A「サッカーというものは学生時代の青春に近いものがあるだろ？」

B「せ、青春？」

A「ある男に恋心を抱く一人の『女』。控えめで奥手な女は自分の気持ちを伝えられずにいた。見かねた『友人の女』は手助けするべく奔走するぅ！」

B「おい、ちょっとま――」

A「友人は『オーバーラップ』をして『男』に近づき趣味や特技、好みタイプを聞き出す」

B「友人は先回りしたのか……」

A「そして女に全ての情報を与え『キラーパス』、恋のキューピッドとして『アシスト』する役目を果たしたのだッ！」

B「強引過ぎるだろ。友人の女は青春しないの？」

A「そして女は男と結ばれ将来を約束する仲に。そして――」

B「『ノールック』かよ……」

A「かたく愛を近いあった二人はまさに幸せの絶頂にいた。二人の未来は幸せにありふれたものになる。誰もがそう思った」

B「いい加減、人の話聞けよ」

A「そう、アイツが現れるまでは……」

B「ドキドキ！じゃねーよ！なんなんだこの茶番は！」

A「ある日、男の目の前に一人の女が現れた。その女には見覚えが会った……はっ！あの時の女だ！そうだ！そうに違いない！絶対そうだ！きっとそうだ！……あれぇ？やっぱり（´・ω・｀）？――」

B「しつけーよ！どんだけ自問自答してんだよ！」

A「そう！その女こそ男の周りを嗅ぎ回っていた『友人の女』だったのだ！」

B「今までの流れでわかるだろ！」

A「男と友人は久々の出会いに舞い上がり、すぐに意気投合。そして二人は食事を共にした。友人は卒業後、職場で出会った同僚と恋に落ち結婚し子供ももうけていた」

B「そういえばサッカーはどこいった？」

A「しかし、友人は結婚生活がうまくいかず夫婦関係が破綻し、現在は離婚調停中だという。男は親身に友人の言葉に耳を傾け、悩みには真摯に答えていた。ところが二人は話に夢中で、終電を逃していた事に気づいていなかった」

B「えぇ……もう嫌な予感しかしない」

A「そして二人は慰めあうように勢いそのままホテルへ（遠い目）……」

B「……」

A「これがオフサイドだ」

B「はっ！」

A「どうした？」
B「いきなり放り込んできたな！」
A「サッカーだけに分かりやすいだろう？」
B「意味わかんねぇよ！どういうこと？」
A「簡単に言えば離婚調停中に手を出してしまえばそれは？」
B「不倫？」
A「そうだ。ということは『オフサイド』だ」
B「なるほど、じゃねーよ！不倫をオフサイドに例えんな！ていうか『レッドカード』だろ！」
A「家庭内から退場ってか、あちゃー。こりゃあ一本取られたぁ（棒読み）」
B「もっと気持ちをこめろよ！熱くなれよ！そして早く続きを聞かせてくれ！」
A「だが、部屋に入ると男の目の前に恐ろしい光景が広がっていた」
B「まさかの急展開!?」
A「強面でいかつい風貌でタンクトップを着たスキンヘッドの――」
B「うわぁ……」
A「スタッフがいた」
B「スタッフかよ！紛らわしいな！」

A「ただのスタッフだと思ったら大間違いだ！」
B「えっ！」
A「スタッフは友人とグルになりハニートラップを仕掛けたのだ。つまり美人局（つつもたせ）」
B「そんな、バカな！」
A「ただのオフサイドではなかったのだ！」
B「オフサイド――」
A「トラップ」
B「やかましーわ！何が『オフサイドトラップ』だ！」
A「まだ終わりじゃない！」
B「えぇ……」
A「散々な目に会った男は自宅に帰ると女が出迎える。男は家族の温もりに懐かしさを感じ、自分が犯した過ちを深く後悔したのだった」
B「なんとなく……わかった気がする」
A「出迎えた女は暗い表情をする男を優しく慰めたが、突然鬼の表情に変貌した！」
B「あぁ（頭を抱える）……」
A「なんと男の首にキスマークがついていたのだぁ！」
B「やっぱり……」

Ａ「これがほんとのぉ？」
Ｂ「戻りぃ？」
Ａ「オフサイド！お後がよろしいようで」
Ｂ「よくねぇよ！いい加減にしろ」

やっぱり俺はやってない（６人コント）

Ａ（男）→弁護士
Ｂ（男）→被告人（主にツッコミ）
Ｃ（男）→検察官
Ｄ（女）→証人１
Ｅ（女）→証人２
Ｆ→裁判官

Ａ「おやおや？Ｂの元気がないようだ」
Ｃ「まるで痴漢したと勘違いされた男が線路を走って逃げたような表情だね」
Ｂ「例え酷くね？」
Ａ「痴漢と言えば裁判だな」
Ｃ「それじゃあ、僕検察官やります」
Ｂ「俺は――」

Ａ「Ｂは犯罪者ね」
Ｂ「被告人だろうが！ていうか勝手に決めんな！……ん？ということはＡは？」
Ｃ「被害者かなぁ？」
Ｂ「おかしいだろ！俺は男に痴漢してんのかよ！」
Ａ「弁護士はオレだな」

Ｆ「それでは開廷～」
Ｃ「えー、ごほん！被告人Ｂは始発の電車内で当時二十代の女性に空席が目立つのにも関わらず、妄（みだ）りに全身を撫で回すように密着及び接触し不快にさせ、周りの乗客にその行為を目撃された後被告人は停車駅で足早に降車。そして線路内に飛び降り逃走を図ったが、待ち伏せていた警察官に現行犯逮捕されました。以上が本件の経緯です」
Ｂ「よく噛まずに言えたな」
Ａ「ちなみに検察側に一つお聞きしたい」
Ｃ「えっ？えっ？」
Ｂ「すげー動揺してる」

Ａ「どのような法律に反するのだろうか？」
Ｃ「ちょ、ちょっと待って下さい……確か刑法だったような……」六法ペラペラ
Ｂ「六法ってあんな分厚いのかよ」
Ａ「痴漢は刑法１７６条、強制わいせつ罪に抵触する」
Ｃ「う、うー……」
Ｂ「さすが我が弁護士。格が違う」
Ａ「そしてこの被告人はもう一つ疑いをかけられている。それは――」
Ｂ「マジ？」
Ｃ「それならわかります！線路内の立ち入りは鉄道営業法３７条違反に当たります！……ふぅ……」
Ａ「なら結論は簡単だ。被告人は――」
Ｃ「もちろん有罪です！個人的には死刑してやりたいですよ！」
Ｂ「私情を挟むんじゃねぇよ。気持ちは分かるけど」
Ａ「そんな焦るな。まだ証人尋問がある」
Ｃ「あっ！忘れてました」
Ｂ「おっ、裁判らしくなってきたな」
Ａ「まずは最初の証人だ」

証人が証言台に立つ。
C「こんな人が嘘をつくはずがない！絶対そうだ！」
B「まだ何も言ってないだろ！」
A「まさに『痴漢して下さい』と言わんばかりの美貌と人間性を兼ね備えた女性だ！」
B「問題発言だぞ、弁護士」
D「フフフ」
A「それでは証言をお願いしよう。D殿」
D「はい、私は通学の為いつものように始発の電車に乗り、すぐに空いている席に座りました。目の前には女性が眠っていました」
C「通学の為に始発の電車を利用しなければいけないとは、なんて健気な女性なんだ」
A「意義ありイイイ!!黙って話を聞けェイ!!」
B「いきなりでけぇ声出すな！情緒不安定か！」
D「途中の駅でそこの男の人が乗ってきて奇声を発しながらサッカーボールを蹴りだしました。いつもの光景です」
B「本当にヤベー奴じゃねぇーか。なんだよいつもの光景って、誰か注意しろよ」
C「ちなみに被告人からサッカーボールしか友達がいないとの自白を得ています」
B「なに自白してんだよ俺……」

Ａ「動機はあるようだ。被告人はサッカーの練習をふりをして、女性に近づき行為に及んでいた」
Ｄ「好意もあった……」
Ｃ「なるほど、これは決定的な証拠ですね」
Ｂ「くだらねぇ、ただの駄洒落じゃねぇか」
Ｃ「因みに奇声を発していたと言っていますが、何を？」
Ｄ「え～と、『ああ～栄冠は～君に輝く～』とか」
Ｂ「聞いたことねぇよ」
Ｃ「自らを鼓舞するような歌ですね　」
Ａ「おかしい。その歌はサッカーとは関係ない」
Ｄ「え？」
Ｃ「では何だと言うんですか？Ａ弁護士」
Ａ「それは野球に関係する歌だ」
Ｂ「へー、そうなんだ」
Ｃ「ちょっと、ちょっと待って下さい！それではこの証人は――」
Ａ「嘘をついている！」
Ｄ「私ははっきり見た！そこいる薄気味悪く、陰湿そうな男が白い玉を蹴っていたの

！存在感だけなら聞こえないベースよ！」
B「ベーシストに失礼だろ！ていうか存在感アリアリじゃねぇか！」
C「嘘だと言うのなら説明してください」
A「残念だがこの証人は今、自らをペテン師と認めたのだ！」
B「なんか弁護士っぽい事言ってる」
A「先ほど証人は野球の歌詞を証言した。そして、この歌の一節には『純白の玉』と書かれた歌詞が存在する」
D「あっ！」
C「はぁ、それが一体――」
B「証人が聞いた歌は野球の歌で、俺は歌いながら野球の玉を蹴っていたって事だろ？」
A「自分で説明して恥ずかしいと思わないのか？」
B「恥ずかしいわ！なんだよ野球ボールを蹴ってるって！」
D「次の証人呼びまーす」
B「おかしいだろ！証人が証人を呼ぶってどういうことぉ？」
A「くっ、まだ証人がいるだと？C検察官、お願いしよう」
C「次の証人は僕の妹です。ど～ぞ～」

Ｂ「身内を呼ぶのかよ。なんて卑劣な検察官なんだ」
Ｅ「はーい！なんなりとお申し付け下さいましぃ！」
Ｂ「なんだその喋り方」
Ａ「元気があってよろしい。それでは証言をお願いしよう」
Ｅ「えっ？証言？」
Ｃ「この証人は被告人が電車の中で犯行に及んでいたのを目撃していたのです」
Ｂ「詰んだじゃん、俺の人生」
Ｅ「ああ！思い出した！あたしはドア付近に立って守護してたんだけど、そしたらその男の人が後から乗ってきて周りをキョロキョロし始めたの」
Ｂ「守護してたってなんだよ」
Ａ「その時の男の服装は？」
Ｅ「赤い帽子を被って、白い長袖に青いオーバーオールをはいてたよ」
Ｃ「犯人は地味な格好していたと」
Ｂ「目立ち過ぎだろ」
Ａ「ブツブツ……」
Ｅ「え？」
Ａ「気にしないでくれ。それでは次の質問だ。被害者はどこにいただろうか？」

E「女の人はドア近くで左手で傘をつり革に引っ掛けて、携帯電話を耳と肩に挟んで何かを話してて、右手で化粧しながら自撮り棒で本を読んでたよ」
B「化け物かよ。自撮り棒で本を読むって、被害者は老眼なのか?」
A「本を読む以前の問題だと思うが、全くツッコミ所の多い被害者だ」
C「ですが、これで真相に辿りつきました。被害者は無防備な所を狙われ、そして被告人はその被害者の隙に付け入るように犯行に及んだのです」
B「ぐっ、こんなアホみたいな推理に反論できない」
A「証人、見たことは正直に話して頂きたい」
E「あ、あたしは見たものをちゃんと話したよ!」
C「言いがかりはよして下さい!指摘があるなら根拠を示して下さい!」
A「ならば、まず被害者の持ち物を全て正確に答えてもらいたい」
E「持ち物?え〜と携帯電話でしょ、それに化粧道具、傘、本、自撮り棒で全部だよ」
A「証人、足元はちゃんと見ていたか?」
E「足元は見てないよ、だって女の人の変な自撮り棒の使い方が気になってしょうがなかったんだもん」
B「可愛い」
C「A弁護士、それが何だって言うんですか?」

Ａ「遂にボロが出たようだな！この小悪魔が！」
Ｅ「えへへ」
Ｂ「可愛い」
Ｃ「被告人は黙って下さい！」
Ａ「この証人は足元を見ていなかったと証言した。だが、それは不自然なのだ」
Ｅ「なんで？」
Ａ「理由は二つある。まず一つは被告人は被害者の全身を妄りに触れているのだ。勿論被害者の所持品にも触れているはず。もし証人が犯行の一部始終を目撃したとすれば足元に置かれているバックを見落とすはずがない！」
Ｃ「ああっ！」
Ｂ「確かに」
Ｅ「ざんねーん！バックは足の間に挟まれてたからあたしの場所からは見えないよ～！」
Ｃ「ほっ」
Ｂ「こっちも理にかなってる」
Ａ「まだだ。もう一つの理由、それは証人が何故上半身しか目撃していないのか。それは証人が手鏡を使って犯行を見ていたからだ」

C「手鏡？」
B「なるほど」
E「鏡を使って見たから何だって言うの？」
A「鏡は映った物を反転させる。すなわち左右が逆になる。もちろん証人は理解していたのだろう？」
E「あ、あれぇ？どっちだったかなぁ？」
B「ちゃんと証言しなきゃ駄目だよ～」
C「意義あり！」
B「誰に向かって言ったんだ？」
C「この証人は鏡の性質を理解していなかっただけで証言自体になんら矛盾を孕んでいません。危うく騙されるとこでした」
E「そうだそうだ！」
B「やっと終わる……」
A「ククク……」
C「これ以上の審理は無意味ではないでしょうか？」
A「それはどうかな？」
E「え～、もう帰りたーい」

Ｃ「まだ何かあるのですか？」
Ａ「不思議に思っていたのだが、被害者は何故空席があったのにも関わらず立ち続けていたのか？」
Ｅ「う～ん、なんで～？」
Ｃ「それは何らかの事情があって立っている必要があったからじゃないですか？」
Ｂ「全然わかんねぇ」
Ａ「難しい話ではない。もう一人別の人間がその場所に存在したのだ」
Ｅ「えぇ！」
Ｃ「そ、そんな！」
Ａ「そう！その人物こそ今回の事件における真犯人だ！」
Ｅ「あれれ～、それって変じゃない？女の人は座っていれば痴漢されずに済んだかもしれないって事だよね？」
Ｂ「確かに」
Ｃ「すなわち被害者と加害者は立ち続けていた？」
Ａ「どうやら結論は出たようだ。今回の事件は痴漢など起きてはいない。なぜなら被害者と加害者は恋人関係にあったからだ！」
Ｂ「な、なんだってえぇぇ！」

C「被告人、わざとらしいリアクションをしないで下さい」
E「へぇー、じゃあその二人が恋人だっていう証拠はあるの？ないよね」
A「チッチッチ」
C「勿体ぶらないで答えて下さい」
A「思い出してもらいたい。事件当時の加害者の服装を」
E「服装？う～ん……」
B「赤い帽子に白い長袖。それと青いオーバーオールだっけ？」
C「良く覚えてましたね」
A「問題は服そのものではない。色に注目してもらいたい」
E「色？信号……じゃないし」
C「配管工のおじさんでもなさそうですね」
B「配管工？」
A「ある国旗の配色になっているのだ」
E「国旗？」
C「見たことあるような……」
B「ま、まさか!?」
A「それでは被告人にお聞きしよう。この女は？」

B「……オランダ（俺のだ）」
C「……」
E「……」
A「もうお分かりだろう。加害者は服装で恋人関係をアピールしていたのだ」
C「ぐうぅ！なんというハチャメチャな推理！けど反論できない！」
A「議論し尽くしたようだ。それでは裁判長、判決をお願いする」
E「裁判長いたんだ」
F「グー……グー……はっ！あー、ゴホン！」
B「今、寝てただろ」
F「最後に被告人、何か言いたい事はあるか？」
B「やっぱり俺はやってない」
D「じゃあ、謎かけで締めたいと思います。『証言に茶々を入れる』とかけまして――」
E「『客が物を購入する』と解きまーす」
C「その心は？」
A「どちらもぉ？」
F「商人から買いまぁす！」
B「証人をからかうな！」

サイコーの友人

A→ボケ
B→ツッコミ

A「おい！」
B「うわぁ!?な、なんだよ急に……」
A「てめぇの喉仏（のどぼとけ）……舐めさせろ！」
B「はい？」
A「てめぇの喉仏が舐めてぇて言ってんだよぉ！」
B「嫌に決まってるだろ」
A「ふざけんなよ――ケッ!!」
B「……」
A「喉ち○こを見せ合う仲だってのに、喉仏は舐めさせねぇておかしいと思わねぇのか？」
B「喉ち○こを見せ合う仲ってなんだよ。気持ちわりぃな」

A「いいか？俺様はなぁ、生まれながらにしてクレイジーなんだよぉ。わかるかぁ？」
B「はぁ……」
A「俺様はなぁ、特別なんだよ！その証拠にこんなことだってできるぜ！――ちょい！」
B「痛ッ!?」
A「見たか！俺様が会得した電気を操る力を！」
B「ただの静電気じゃん。この時期よく起きるんだよなぁ」
A「痺れすぎて頭がおかしくなっちまったようだな！」
B「クレイジーなヤツに言われたくねぇよ」
A「この世に恐れるものなんてありゃしねぇぜ！」
B「ゴキブリは？」
A「あー無理無理。アイツは生理的に無理。繁殖力あるし、生命力はスゲーし、飛ぶし、黒いし、キモいからな」
B「やけに詳しいな。ゴキブリの方がまともに見える」
A「だがイカツイ顔でマスクを着けた男でも俺様の敵じゃねぇぜ」
B「マスク着けてたら顔見えねぇじゃん。プロレスラーにいそうだけど」
A「じゃあよぉ、Bはボコボコにしたいほど憎いヤツがいないってのかぁ？」

B「『じゃあ』の使い方おかしいだろ。ラリってんのか」
A「こまけぇことは気にすんな。例えばな、オシャレなヤツは買った服に付いてる変なヒラヒラもオシャレに見せる。そういうことだろ？」
B「それタグじゃん。ファッションの一部じゃねぇよ」
A「俺様がボコボコにしたいほど憎いヤツ、教えてやろうか？」
B「興味ない」
A「こんなにいるんだぜ？……5体」
B「聞いてないし、何だよ5体って。もう死んでるじゃん。お前最低だな」
A「まあ何度か捕まった事もあったけどな」
B「今度は妄想かよ」
A「刑務所の前まで行ったが、俺様を裁ける人間は存在しなかったようだぜ」
B「入れよ。刑務所の前で引き返してんじゃねぇよ。刑務所を神社に見立ててお参りでもしたの？バカじゃないの」
A「おい！」
B「何だよ」
A「バカってなんだよ！ふざけんなよ！謝れよ！」
B「自分でクレイジーって言っておいてバカで怒るのか」

A「オヤジの悪口は許せるが、俺様とペットの悪口だけは絶対に許せねぇ質なんだ」
B「家族構成が謎過ぎる。信頼出来るのペットしかいないし」
A「ちなみにペットは俺様の女だぜ♪」
B「はぁ!?お前彼女をペット扱いしてんのか、ゲスヤロウだな」
A「それにオヤジは彼女の親だしな」
B「彼女のお父さんと仲悪いのかよ。将来どうするつもりなんだよ」
A「後で処分しとくから大丈夫っしょ?」
B「こえーよ。何だよ処分するって……」
A「でもな、俺様にも譲れない事が一つだけあるんだぜ」
B「なに?」
A「友人だけは裏切らないってことさ♪」
B「お前は最高の友人だな――ってなるわけねぇだろ!!」

相方はラッパー

A→ボケ
B→ツッコミ

A「以前話したんだけど……」
B「ああ、コンビを解散したいって話だっけ？」
A「うん」
B「Aは解散したら何するの？」
A「ラッパーになろうと思うんだ」
B「へぇー、いいじゃん」
A「それでさ、色々考えてきたから聞いてもらいたんだけど」
B「ラップとかよく分かんないよ」
A「全然大丈夫！適当にツッコんでくれればいいから！」
B「ツッコミを合いの手みたいに言うなよ。しかも未練タラタラじゃないか」
A「じゃあいくよ？」

B「いつでもどうぞ」
A「――ヨウ！ヨウ！うちの実家はラーメン好きな面々集う！自慢の親父はイケメン！女も惚れる素直な半面、男も唸る意外な一面！座右の銘に『謝罪は御免』！長年愛用、スマホは『りょ』『う』『め』『ん』！好きな映画はＸ（エックス）メ～ン！イェー！」
B「……」
A「どう？」
B「え？もう終わり？」
A「うん」
B「ああ……いいんじゃないかな、たぶん」
A「言いたいことがあるなら言ってよ」
B「ツッコム間がない」
A「あっ！ごめん！今度はゆっくりやるね」
B「やるのか……」
A「うん。じゃあいくよ？」
B「どうぞ」
A「――ヨウ！ヨウ！うちの実家はラーメン好きな面々集う！」
B「出だしは悪くないんじゃない？」

A「自慢の親父がイケメン！女も惚れる素直な半面！」
B「イケメンで素直って羨ましい」
A「男も唸る意外な一面！座右の銘に『謝罪は御免』」
B「謝らないってこと？素直じゃねぇじゃん」
A「長年愛用スマホは『りょ』『う』『め』『ん』」
B「どんなスマホだ。どうやって持つんだよ」
A「好きな映画はXメ～ン！イェー！」
B「お父さんの好きな映画はXメンなんだ」
A「ううん、違うよ。親父の好きな偉人がマルコムXなんだけど、ラップじゃ表現できないから仕方なく映画にしたんだ」
B「なにが仕方ないんだ！Xしか共通するところねぇだろ！」
A「もう一個いい？」
B「今度こそ頼むよ」
A「うん、じゃあいくよ――ヨウ！ヨウ！うちの家族は情熱あふれる熱帯部族！」
B「出だしは悪くないんだよ」
A「優しい祖父母は老体！愛する両親倦怠！」
B「『ぞく』で韻を踏むんじゃないんだ。ていうか情熱あふれてねぇじゃん」

A「過去に囚われる老人、江戸は参勤交代！取り残される若者、しかし世代も交代！」
B「相方こうたーい！」
A「独り善がりな教師の授業は眠たい！虚ろゆく景色オレは早退！」
B「反抗期かよ」
A「未来を憂う社会は停滞！身勝手な押し付け責任連帯！」
B「ニートの言い訳」
A「空気に流され周りは擬態！ゴーイング・マイ・ウェイなオレは個体！」
B「かっけー」
A「叱る親に楯突く愚息！拳を握る母は裸足！」
B「だからなんだよ」
A「ぶっ飛ぶ意識、過ち気づく！仁王立ちする姿は正に魔族！」
B「かーちゃんに謝れ」
A「そんなかーちゃん海兵たーい！イェー！」
B「海兵隊のかーちゃんに楯突いたのか。よく生きてたな」
A「ううん。かーちゃんは看護師だよ」
B「嘘かよ」
A「やっぱり向いてないよね……」

Ｂ「いーや、そんなことない」
Ａ「ホントに？」
Ｂ「コンビは解散するけど、ラップ芸っていうのも悪くないかも」
Ａ「えへへ、じゃあ二人でラップやろうね！」
Ｂ「相方こうたーい！」

ユーは何しに床屋へ?

A→ボケ（オランダ人の男）
B→ツッコミ（マスター）

A「ヘーイ!」
B「うわぁ……また来たよ……」
A「すぅー……はぁぁぁ……（^^）d」
B「ここただの床屋だぞ。なに『新鮮な空気取り込みました』みたいな顔してんだ?」
A「やぁ、マスター。会いたかったヨ。またいつものお願いしちゃおかナー」
B「お客さん、今日二度目だよね?ラーメン屋の常連じゃあないんだから……日本語、分かる?」
A「ワハハハ!だいじょーぶ、だいじょーぶ。今日は固めでお願いしようかと思っただけなんだヨ」
B「全然分かってねー。固めってワックスの事か?まさか、ラーメンの事じゃないよな?」

A「ウーン！それにしてもこのインテリアはとても愛国心を掻きたてるようなデザインをしてるネー」
B「インテリア？お客さん、何言ってるの？」
A「これだヨー、これ。国旗をぐるぐる巻いてあるオシャレなポールのことサ」
B「それ国旗じゃないから！サインポールって言うんだよ！……そういえばお客さん、どこから来たんだ？」
A「オランダって言えば分かるかナ？」
B「はー、わざわざ遠くから来て下さってありがたい限りだ」
A「モー十年ぐらい日本に住んでるからネ。あぁ、故郷が懐かしいナァ」
B「サインポールを見て故郷を懐かしむなんて変わってるな。まぁ、こんな小さな散髪屋に二度も来てくれんたんだ。立ち話もなんだから中に入ってくれ」
A「オゥ……マスター、ありがトー。マスターの懐は深淵より深いデース」
B「喜んで良いのか分からねぇ。深淵なんて言葉よく知ってるな」
A「――相変わらず静かなお店ダ。忍者でも出てきそうだネー」
B「冷やかしか？外国人が忍者を出せば何でも許されると思うなよ」
A「マスターの顔は人殺し……じゃなかった。サムライのような面構えダァ！」
B「どっちも一緒じゃねぇか。少しは言葉を選びやがれ」

A「ゴメンネゴメンネ。言葉のアヤコだよ」
B「言葉の綾だよ!誰だよ、アヤコって。スナックのババアみてぇな名前だな」
A「まさに言い得て奇妙ってネ!」
B「妙だよ!あんたの存在の方が奇妙だわ!いいからさっさと座ってくれ」
A「ヨイショ」
B「で、どうしますか?」
A「過ぎたるは猶、及ばざるが如し」
B「は?」
A「ほどほどデ」
B「ほどほどって……更に短くするってこと?」
A「左様でゴザル」
B「他はどうします?」
A「不毛でゴザル」
B「切りすぎたら髪が無くなっちまうなぁ!!」
AB『ワッハッハッハ!!』
A「――痛っ!」
B「笑うんじゃねぇよ」

A「叩かなくてもいいジャン！もし手にハサミ持ってたらと思うとゾッとしちゃうヨ」
B「ならもう喋るなよ。耳を切り落とされたくなかったらな」
A「終わったら起こしてクダサーイ……」
B「……」
A「……」
B「……」
A「……」
B「……よし。終わったぞ」
A「ふわ、はっくしょーん!!」
B「うわぁ!?びっくりした！」
A「ズズ……ゴメンネ。マスターの手の動きがいやらしすぎて我慢出来なかったヨ（？▽？）」
B「その言い方やめろ。違う意味に聞こえるから。ていうかクシャミと関係ないだろ」
A「でもなんだかこの時期になると鼻がムズムズするんダ」
B「それ花粉症じゃないか？病院で薬をもらってきたらいい」

A「アハハやだナー、マスター。ここも病院じゃないカァ！」
B「床屋だよ。あんたの言ってるのは美容院のことだろ」
A「なんだっテ!?」
B「そこは『ワッツ!?』じゃないの？」
A「ｓｈｉｔ（シット）……」
B「おせぇよ。日本に染まり過ぎたみたいだな」
A「ほんとだヨ。マスターと話してたら故郷に帰りたくなったネ」
B「ずいぶん短絡的だな。オレとの会話でオランダを感じる部分あったか？」
A「そうだ、お金――」
B「ああ！いいっていいって！ほとんど何もしてないから！」
A「なんて優しい人なんだ！琵琶湖より広い心の持ち主ダ！あなたって人は！」
B「ああ、もう二度と来るな」
A「親愛なるマスター、あなたとの友情を祝してコレもらって帰りますネー」
B「なっ!?ちょっと待て!?」
A「――よっこらショット。フフフーン♪チューリップと水車はラーラーラー♪」
B「だからそれ国旗じゃねぇから!!」

カタカナが苦手

B「ハウアーユー？」
A「わからねぇ、俺にはさっぱりわからねぇ」
B「なに深刻な顔してんだ？カタカナを使いすぎる部下の企画書を読む上司のような表情してるけど」
A「そうなんだよ、聞いてくれよ。俺ってばカタカナが苦手みたいでさ。例えばオーストラリアとオーストリアみたいな一文字違うだけで全く別の国に変わっちゃうとかさ」
B「あれは確かに紛らわしい。でも国なら地図見ればどうにかなるでしょ？」
A「じゃあジャイアンとジャイアンツは？」
B「えっ？いやぁ、考えたことないな……」
A「ジャイアンはドラえもんに出てくるから、そのジャイアンがたくさんいるからジャイアンツなんだよな？」
B「なんでそうなる？ジャイアンばかり出てくるドラえもんなんて見たいか？子供のドラえもん離れが始まるぞ」

A「じゃあアンコールとアルコールは初めて日本武道館でライブをしたバンドが予想外のアンコールに戸惑ってアルコールで緊張を和らげてるってこと？」

B「アンコール受けて緊張する人っているの？ていうかライブとかバンドとかお前めっちゃカタカナ使うじゃん」

A「じゃあハンドとハンドルは握る方がハンドで、握られる方がハンドルってことか」

B「ハンドルのこと握られる方とか言う奴初めて見た。お前『ハンドルを握られる』なんて日常的に使ってんの？」

A「あれぇやっぱ逆かなぁ？ハンドが握られる方で、ハンドルを握る方がしっくりくるかも」

B「わけわかんねぇよ。どっちも握るでいいだろ！そもそも手でハンドルを握るって考えるのが普通だから！」

A「じゃあカードとソードは切る方がカードで、斬られる方がソードって覚えればいいんだな？」

B「どっちもキルものだよぉ。まず日本語から勉強しようよぉ」

A「じゃあハスキーとスキーはシベリアを滑るように走る方がハスキー？」

B「走るように滑る方がスキーって言いたいんだろ？ややこしいよね？ウンコ味のカレーみたいなもんだよね？それに何でシベリア限定なの？シベリアとハスキーわける

必要なくない？」

Ａ「じゃあヒントとビンゴは田舎っぽい方がビンゴだね」

Ｂ「方言じゃねぇんだよ。茨城のことをイバラギって言うのと同じだぞ。なんでも濁れば田舎っぽくなると思うな」

Ａ「じゃあヒントとピントはどうやって区別するんだよ！」

Ｂ「お前のピントがずれてんだよ！書いてみりゃわかるだろ！」

Ａ「じゃあピン子とピーコは？」

Ｂ「ピーコはおすぎとセットだろ！それにピン子の子は漢字だから！いい加減にしろ」

少年野球と親

Ａ「あら～、同じクラスの関取さん。おはようございます」
Ｂ「あの力士じゃないんで、番付で呼ぶの止めてもらえます？クラスって相撲部屋っていう意味じゃないんで」
Ａ「ごめんなさい。あなたの息子さんがいつも泥まみれだったものでてっきり」
Ｂ「てっきりってなんだよ。泥まみれだからって相撲でもやってると思ったんですか？うちの息子が野球やってるのあなたも知ってるでしょ？」
Ａ「ええっ!?あれって野球だったんですか!?この前土俵の上でのたうち回っていたじゃない！」
Ｂ「だから力士じゃねぇよ。なんだよ土俵の上でのたうち回るって。マウンドのこと土俵って言う人初めて見た」
Ａ「うちの子も野球やってるんですけど、四十肩で痛めてるんです」
Ｂ「あんたの息子いくつだよ。四十肩っておっさんがなるやつだぞ」
Ａ「ボールを取る度に『ヨッコラショ』とか言うんですよ。笑っちゃいますよね～」
Ｂ「だからおっさんじゃねぇか。草野球じゃないんですよ。あのぉ、あなたの息子さ

ん小学生ですよね？」
A「はあ!?うちの息子が少年院に入ってるとでも仰りたいんですか？」
B「言ってねぇよ。ほら、あなたの息子さんがマウンドに立ってますよ」
A「どうしてなの!?ピッチャーなんてやらされてるなんて許せないわ！うちの子は猫背なんですよ！」
B「はぁ、そのうち直るんじゃないですかね。それならどのポジションが良さそうなんですか？」
A「キャッチャーよ。いつもしゃがんでいれば猫背なんて気にならないでしょ？」
B「あんたはキャッチャーをなんだと思ってるんだ？猫背しかなれないとでも思ってるのか？」
A「あなたの息子さんなんてベンチでのほほんと座ってるだけじゃない！」
B「しょうがないでしょ。怪我してるんだから」
A「ならどうして首に白いマフラーなんて巻いてるのよ！」
B「包帯だよ！白い包帯を巻いてるんだよ！」
A「それにメガホン持ってヤジまで飛ばしてるじゃない！」
B「応援してるに決まってんだろ！どこに味方のピッチャーにヤジを飛ばす奴がいるんだ！」

A「チャンスでうちの子に回ってきたわ！」
B「ヒットが出れば逆転できそうですね――あっ、二塁ランナーが盗塁した。更にチャンスが広がりましたよ！」
A「どうして、どうしてなの？そんなにうちの子が信用できないっていうの？」
B「違いますよ。そういう作戦なんですよ」
A「ふざけないで下さい！うちの子は打球を真上に打つのが得意なんですから！」
B「それキャッチャーフライですよね？真上に打つのが得意なのって監督とかコーチぐらいでは？」
A「だって真上に打てばランナーが帰ってこれるじゃない」
B「これません。そんなルールありません。なんかさっきから勘違いしてません？」
A「そんな……うちの子に相撲でもとれって言うの？」
B「言ってねぇよ。もういいよ」

ドライブデート

A「もうおっそーい。」
B「ごめんごめん、寝過ごしちゃって」
A「居眠り運転もほどほどにしないと、こうやってガソリン抜いちゃうぞ」
B「してねーわ。居眠り運転なんかしたら事故るだろ――おい、手際よくガソリン抜いてんじゃねぇよ。そんな火事場泥棒みたいな彼女嫌だわ」
A「早く行こうよ」
B「わかったよ」
A「ああ！この車って雨に弱い軽トラックだよね！そうでしょ？」
B「俺は軽トラックで迎えに行ったの？すげぇ恥ずかしいだけど。ていうか雨に弱いのってマリオカートだから」
A「あれぇ？おかしいなぁ。このカーナビ、文字が小さくて少し離れないと見えな～い」
B「お前は老眼か。俺はおばあちゃんとデートとしてんの!?」
A「なにこの初代プレステのソフトみたいなの？」

Ｂ「ＣＤだよ！なんで例えがそんなに古いんだよ！もっとあるでしょ、医者が頭につけてるみたいなやつとかさ」
Ａ「えーそんなの見たことなーい。頭にＣＤつけてる医者なんているのぉ？」
Ｂ「俺だってないわ！例えだって言ってるだろ！」
Ａ「この車、助手席にブレーキついてない」
Ｂ「当たりめぇだろ。教習車じゃねんだから」
Ａ「変なの。私のパパの車にはついてたのに」
Ｂ「それ外車だからじゃね？左ハンドルならブレーキもついてるはずだし」
Ａ「違うよ！マリオカートだよ」
Ｂ「一人しか乗れねぇじゃねぇか！お前はどこに乗ってたんだよ！」
Ａ「乗れる場所なんて一つしかないじゃない。肩車」
Ｂ「ワイルド過ぎるだろ！お前の親父、どういう神経したんだ？」
Ａ「その日雨が降ってて私が傘をさしてあげたんだから」
Ｂ「無理無理。ぜってぇビショビショになる」
Ａ「はい、お弁当持ってきたよ」
Ｂ「おっ、ありがとう。ちょうど腹が減ってたんだよ」
Ａ「Ｂが好きなあんパンだよ！」

B「えっ、あっ、ありがとう……」
A「うふふ」
B「いってぇぇぇ!?なんだよこれ!?」
A「うふふ、指輪だよ。結婚しよ?」
B「ふざけんな!あんパンの中に指輪なんて入れるなよ!銀歯がかけちまったじゃねぇか!」
A「代わりにダイヤの歯になったね」
B「上手くねぇよ!血が止まんねぇよ」
A「はい、キシリトール」
B「そんなんで止まるわけねぇだろ!オキシドール持ってこい!」
A「はい、メントール」
B「うーん、ひんやりする。そうそうこれが欲しかっだよってなるわけねぇだろ」
A「そんな怒んないでぇ。仲直りのチューでもすれば治っちゃうから」
B「愛の力で傷を癒すってか、やかましいわ!」

中古で買った冷蔵庫

A「僕、リサイクルショップで家電を見るのが日課なんですけど」

B「そういうのって、人が使った家電なんか見て買いたいとか思ったりするもんなの？」

A「それがさぁいつものなら見て帰るだけのつもりだったんだけど、一つだけ『これだ！』っていう冷蔵庫を買っちゃったんだよね」

B「そんないい冷蔵庫だったの？」

A「それがね、値札の商品の状態が書いてあるじゃない？そこに『こちらの冷蔵庫を買ったお客様におまけとして食材がついてきます』って書いてあったのよ」

B「嫌でしょ。常識的に考えていつから入ってたか分からない食材なんて欲しくないでしょ」

A「まあ僕も気になってはいたんだけど、ワクワクした気分を抑えつつ中身を確認しないで買ってみたんだよ」

B「お前すげぇな。中も確認せずに普通買うか？福袋感覚で買うんだったら宝くじ買った方がもっと有意義じゃん」

A「それで、その中身がとてつもなくヤバかったんだよ……（（　；。д。））ガクガクブルブル」

B「急にホラーテイストになるなよ。そんな事件に巻き込まれたみたいな顔したって俺は関知しないぞ」

A「最初に海藻みたいな髪の毛がブワァッと出てきたんだ」

B「それって昆布かな？いやワカメの可能性もあるな。確か値札に『食材がついてきます』って書いてあったんだよね？」

A「次に全体が緑色の生首」

B「たぶんキャベツかな？キャベツと生首の区別がつかないんだったら免許証返納しに行った方がいいんじゃない？」

A「次に肌が紫色に変色した腕」

B「サツマイモだね。さっきから思い込み激しすぎだろ。お前今までどうやって生きてきたんだ？めっちゃ心配になってきたぞ」

A「次に色白でムチムチした太もも」

B「大根だけいやらしいな。お前大根をそんな目で見てたのかよ」

A「次にピンク色でムチムチしたケツ」

B「桃でいいだろ！だからなんで太ももとケツだけ表現がいやらしいんだよ！下半身

フェチか！」
A「次に焼かれた目玉」
B「どんな表現だ。目玉焼きでいいだろ。ていうかなんでもう調理されてんだよ」
A「次に脳みそを型どったアイス」
B「回りくどいな、ただのアイスじゃねぇか。ていうか脳みその形をしたアイスってどうやってつくったんだよ。俺も見てみてぇよ」
A「取って置きがマヨネーズの容器に入った血液」
B「ケチャップしかねぇだろ！マヨネーズの容器が理解できてなんで血液に変換されるんだよ！」
A「やっぱり気味悪いから食材だけ返品してこようかな……」
B「全部してこい！いい加減にしろ」

半魚人

A「知り合いに風変わりな生き物がいるんだ」
B「生き物って言い方は失礼だろ。ましてや知り合いでしょ」
A「ソイツ半魚人なんだよ」
B「半魚人？半分が魚で半分が人間ってこと？」
A「何度も言わせるなよ」
B「一回しか聞いてねぇだろ。でもそれって人魚ってことでしょ？」
A「僕も人魚だけは見たことないからわかんない」
B「俺だってねぇわ。なんだよ『人魚だけは』って。未知の生物はなんでもござれってか」
A「あのさぁ、水を差すのやめてくんない？」
B「まあ、魚だけに水がなきゃ生きれないからね」
A「今回は水に流しておくよ」
B「何でお前さっきから上手いこと言おうとしてんの？しかもちょっと不機嫌だし」
A「それでその半魚人の特徴がこれまた目から鱗なんだよ」

Ｂ「へぇ」
Ａ「体の９割が魚で肘だけ人間なの！」
Ｂ「ほぼ魚じゃん。でも肘は肌色ってことは腕はあるのか……」
Ａ「肘から先は水掻きになってるんだけどね」
Ｂ「水掻きってカエルかよ」
Ａ「それでさぁ、面白いのがさ１０回ゲームってあるじゃん？」
Ｂ「ある単語を１０回言って体の部位とかを答えさせるゲームだろ？」
Ａ「そうそう。その半魚人が１０回ゲームで肘を指して答えさせるんだけど、答え何だと思う？」
Ｂ「肘だろ」
Ａ「じゃあインゲンって１０回言ってみて」
Ｂ「インゲンインゲンインゲンインゲンインゲンインゲンインゲンインゲンインゲンインゲン」
Ａ「ここは？」
Ｂ「人間！」
Ａ「インゲンでしたー！」
Ｂ「なんでだよ！なんでお前が引っかかってんだよ！」

A「ん？あれ？体の９割がインゲンだったような……」
B「魚がインゲンにすり変わってるぞ。もはや生き物ですらないし大丈夫か？」
A「インゲンだって生きてるんだ。痛みを感じるんだ」
B「人間みたいに言わないで。意味が通ると余計ツッコミにくいから」
A「話を戻すよ。その半魚人の両親がなんと――」
B「そんなの決まってる。魚と人間のハーフ」
A「魚と人魚のハーフなんだよ！」
B「ほぼほぼ魚じゃねぇか！だから肘だけ人間になるんだよ！」
A「でもソイツ、鮫みたいな見た目に反してとても優しい心の持ち主なんだ」
B「要は中身だからね。外見じゃ人は判断できないからね」
A「魚以外の人間は襲わないし！」
B「最低だよ。弱いものイジメじゃん。人間以外に魚しかいないってどんなところに住んでんだよ」
A「あはは、海しかないでしょ」
B「やっぱり魚じゃねぇか。はあ……人間の要素が無さすぎ」
A「で、でも両性類だし！」
B「水掻きだけだろ！そんなもんカエルだよカエル！」

Ａ「僕たちだってインゲン界に片足突っ込んでるし！」
Ｂ「それを言うなら人間界だろ！俺たちの肌は緑色なのか？俺たちは人間界に両足突っ込んでるのっ!!」
Ａ「それさ○なクンの前で言える？」
Ｂ「言えるわ！」
Ａ「被り物が本体だとしても？」
Ｂ「だとしてもだよ！」
Ａ「僕には言えないよ。半魚人に『インゲンを食べろ』だなんて」
Ｂ「しつけぇよ。いい加減にしろ」

タバコとライター

A「最近ムカつくよなぁ、上司のC」
B「ああ、一言多いよな。学歴で人を見下す奴に限って人一倍プライドが高いからな」
A「ホント、イクメンだかイケメンだか知らねぇけど鼻にくるよな？」
B「頭にくると鼻につくがごっちゃになってるぞ。そんなことよりアイツ、学生時代はもっと凄かったらしい」
A「バスケとバレーを掛け持ちしてたんだっけ？高身長は羨ましいねぇ。代表にも選ばれるくらいの実力はあったって聞くし」
B「まったく、親の顔がなんとやら」
A「ははっ、親の顔を見せたいだろ？」
B「親の顔が見てみたいだよ。お前の親の顔なんて見せてどうする」
A「目に浮かぶねぇ。Cの動揺する姿が」
B「いきなり赤の他人に親の顔を見せたら誰だって動揺するだろ」
A「あっ、いけね！ライター持ってるのにタバコ忘れた！」
B「珍しいこともあるもんだ。雨でも降るんじゃねぇか？」

A「雨なんか降ったらライターも使えない。オレたちも使い捨て」
B「お前、ヘビースモーカーだしこれを機にやめれば？」
A「やめたくてもやめれねぇんだわ。Cがうるさいから」
B「は？どういう意味？」
A「Cがさ、お前の吸ってるタバコしか吸いたくねぇって言うからさ」
B「表現が気持ちわりいよ。お前らどういう関係なんだよ」
A「その代わりにライターやるよって言うから断れなくて」
B「馬鹿だろ。お前ら天然なのか？Cもタバコだけ持っていってどうしたいんだ？」
A「まあ、火種なら会社にたくさんあるからね」
B「おっ、上手いこと言うじゃん」
A「よく気づいたねぇ。頭の回転の速さは模範囚だ」
B「嬉しくねぇよ。俺は刑務所にでも入ってたのか？」
A「久々のシャバの空気は旨いだろ。一本どうだ？」
B「ライターだけ見せられて俺はどうしたらいいんだよ！タバコ持ってこい！」
A「はぁ……こんな下らない話ができるのも今だけかね？」
B「そうだな。業績も右肩下がり出し、そのうち誰か辞めそうだもんな」
A「顧客の顔色伺って死に物狂いで働いても利益が出ないんじゃ、そりゃ評価され

ねぇわ」

B「難しいよな。なんかこうでっけぇアイデアとか湧いて出てくれればなぁ」

A「芸人の漫才に似てるよな？」

B「ああ？」

A「自分が面白いと思ったことと周りが面白いと思ったことが正反対みたいな？」

B「致命的だな。芸人に向いてないんじゃないか？」

A「今築いた実績よりも昔取った杵柄みたいな？」

B「たぶん、あってる」

A「名ばかり管理職のオレより年下のくせに、Cの方が年収が上みたいなものか！」

B「自分で言って恥ずかしくねぇのか？そんな胸を張って言うようなことじゃないぞ」

A「これならイケる！イケるぞぉ！」

B「何が？」

A「反りの合わないCと協力すればオレはこの会社、いやこの国でテッペンを取れるってことさ！」

B「お前あれだけCを嫌ってたのに……」

A「そうさ、オレの持ってるライターとCの持ってるタバコが一つになれば――」

B「禁煙失敗だな」
A「思い立ったら行動だ！じゃあな！」
B「おい、ちょっと――行っちまったよ」

B「一人になっちまったか。たまには一人でくつろぐのも悪くない」

C「おーい、こんなところにいたのか！」
B「あれ？C部長じゃないですか。どうしたんですか？」
C「Aの奴に辞表を突きつけられたんだ。だから持っていたライターで燃やしてしまおうと――」
B「……すみません。話がよくわからないんですが」
C「お前、何も聞いてないのか？」
B「はい」
C「とりあえずAを見つけたら顔を出すように伝えてくれ」
B「はぁ……（タバコって辞表の隠語だったのか。部長は辞表をライターで燃やそうとしたんだな）」

B「俺はどっちも持っておこう」

休みたい

Ａ『もしもし、Ｂ先輩ですか？』
Ｂ「なんだよ、Ａか。どうした電車でも遅れてるのか？」
Ａ『えー、それが風邪っぽいっので今日は休ませてもらおうと思いまして……』
Ｂ「はぁ!?休む!?今日は困るんだよねぇ。大事な取引先との打ち合わせもあるし。ていうかさぁ、風邪くらいで休むなんて図々しいと思わない？」
Ａ『それなら明日休みます』
Ｂ「今日じゃなきゃいいって意味じゃねぇよ。お前、本当は仮病だろ？」
Ａ『言いがかりはやめてください。会社に立て籠りますよ！』
Ｂ「こいよ。早くこいよ。そして仕事しろ」
Ａ『そんな態度とっていいんですか？後悔しますよ？仕事中に病状が悪化して、会社に泊まり込みになってもいいっていうんですね？』
Ｂ「すげぇ喋るじゃん。お前、やっぱり嘘ついてるだろ？」
Ａ『先輩にはガッカリしました。やっぱりうちの会社ってブラックなんですね』
Ｂ「気持ちはわかるけどよぉ、社会人なんだから風邪くらい薬を飲むとか、マスクつ

けるなりすればどうにかなるでしょ？」
A『でも従業員をいたわるのも会社の責務じゃないんですか？』
B「そんなこと俺に言わないでくれよ。大きい声じゃ言えないけど、俺だって本当は休みたいよ。でも世の中そんな甘くないのよ」
A『でも今時、休みも気軽に取れない会社なんて長続きしないと思うんですよ』
B「それなら来月、有給つけてやるから今日だけは来てくんないか？」
A『でも有給は国民の権利です。先輩が勝手につけるものではありません』
B「でもでもうるせぇ！お前はガキかッ！」
A『あれぇ、電波悪いなぁ……でもでも？』
B「もしもし、みたいに言うな！バカにしてんのか！」
A『えっ？今日の昼、何が食べたいって？う～ん、ハンバーグが食べたい！』
B「うん？彼女でもいんのか？」
A『違いますよ。母がお見舞いに来てくれたんです』
B「おっ、そうか。本当に風邪ひいてたんだな」
A『母さん、少し静かにして。今、コールセンターに苦情入れてるんだから』
B「なんで俺がコールセンター役なんだ？」
A『まあ、僕に合わせて下さい。母が最近買ったエアコンが不具合で動かなくなって、

僕が代わりに苦情を入れるって約束してたんですよ』
B「そんな約束、今果たさなくてもいいだろ……」
A『まあまあ、すぐ終わるんで』
B「勝手に終わらせんな！まだ話は終わってねぇだろ！」
A『それならどうすれば僕は休めるんですか？直談判すればいいんですか？』
B「そうだ。それがいい」
A『もう僕は騙されません。そうやって会社に監禁する気ですね？』
B「お前は会社をなんだと思ってるんだ？」
A『だって先輩、以前言ってたじゃないですか。うちの会社は決まりごとが多くて、拘束されっぱなしで疲れるって』
B「拘束されるって言ったって、監禁するなんて思考にはならないだろ」
A『違いますよ！僕は紐で縛られたり、猿ぐつわをつけられたりするのが好きなんですよ！』
B「お前は拘束プレイが好きなんだな……」
A『じゃなきゃ変態的な会社なんかで働きたいなんて考えないです』
B「変態に言われたくねぇよ」
A『先輩は僕と同じ側の人間だと思ってたのに……』

B「物理的に縛られるのはゴメンだ」
A『わかりました』
B「おおっ！やっとわかってくれたか！それなら早く出社してこい！」
A『今日から縛られる人間から縛る人間になります』
B「へっ？」
A『アハハ、ちゃんとネクタイ緩めといて下さいね。今絞めに行きますから――』
B「ちょっ、あっ、電話切られた……ネクタイを絞めにくる？どういう意味だ？」